

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 李 夢迪

論 文 題 目

派生語【X化】の日中対照研究

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	杉村 泰
委員	名古屋大学教授	林 誠
委員	名古屋大学准教授	鷺見 幸美

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本研究は日本語の派生語「X化」と中国語の派生語“X化”について、両者の語基Xの違いや意味的・文法的な違いについて論じたものである。【X化】は従来、「(小説を)映画化する=映画にする」のように、「X₀{を/が}ある性状・状態に～{する/なる}」という意味を表すとされてきた(田窪(1986)、加納(1990)など)。しかし、「男性が女性化した」「製品が個性化した」のように、【X化】は単に「X₀{を/が}Xに～{する/なる}」とは解釈できない場合もある。そこで本研究ではX₀とXの関係を詳細に見ることにより、【X化】の意味的・文法的特徴を分析した。(「」は日本語、“”は中国語、【】は日中両語併用を示す。)本論文は次の8章からなる。

第1章では、序論として派生語【X化】の位置づけを示し、日中の品詞性の違いなどの問題提起をし、本研究の分析方法について述べている。

第2章では、日本語の「X化」と中国語の“X化”に関する先行研究を概観し、本研究の目的として次の4点を挙げている。

1. 派生語【X化】にどのような意味があるかを分析する。
2. 日本語の「化」と中国語の“化”に前接する語基の異同を明らかにする。
3. 日本語の「X化」と中国語の“X化”が名詞用法、形容詞用法、動詞用法、副詞用法のうちどの用法で使われやすいかを明らかにする。
4. 日本語の「X化」と中国語の“X化”の動詞用法において、どのような語が自動詞用法、他動詞用法として使われやすいかを明らかにする。

第3章では、日中両語における【X化】の意味を前接語基の品詞ごとに分析し、以下のように日本語は九種類、中国語は十種類のタイプに分けている。

「名詞語基+化」

- A. 項目変化：語基そのものに変化する(現金化、商品化)
- B. 様式変化：語基の様式によって表現するようになる(数値化、ポイント化)
- C. 属性変化：語基の表す属性の一部/典型的な特徴を持つようになる
(女性化、幼児化)
- D. 所有変化：語基の表す概念を持つようになる(規格化、構造化)
- E. 量的変化①：語基が重視されるようになり、広がる(情報化、電子化)
- F. 量的変化②：語基の表すものに行渡る/広がる(大衆化、全国化)
- G. 所有変化②：語基が所有者になる((军队)国家化)…中国語のみ

「形容詞語基+化」

- ・語基の表す状態に変化する(複雑化、特殊化)

「動詞語基+化」

- A. 語基の表す状態を持つようになる(固定化、肥大化)
- B. 語基で表される動作の結果状態に変化する(立法化、外注化)

論文審査の結果の要旨

第4章では、日本語の「化」と中国語の“化”に前接する語基を①日○中○、②日○中×、③日×中○、④日×中×（○は言えるもの、×は言えないものを指す）という四つのタイプに分けて、さらに前接する語基を「温暖化」や“国家化”のように語基が一方しかないもの、【专业化】のように語基が日中同形異義のもの、【合理化】のように語基が日中同形類義のもの3つに分け、日中の異同を考察している。

第5章では、現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）を利用して、日本語の「X化」を名詞的用法、形容詞的用法、動詞的用法として用いられやすいものに分類している。このうち動詞的用法においては、階層的クラスタ分析および正準判別分析を行うことにより、自動詞優勢語群、他動詞優勢語群、自他両用語群に分類し、「C. 属性変化」や形容詞語基の場合は自動詞として用いられやすく、「B. 様式変化」や「D. 所有変化」の場合は他動詞として用いられやすいことなどを指摘している。

第6章では、北京語言大学語言智能研究院のBCC語料庫を利用して中国語の“X化”の品詞性や自他性を分析し、中国語では自動詞優勢語群と自他拮抗語群の二つのクラスタに分かれ、他動詞優勢語群は見られず、“拟人化”“公有化”のように人の手を経なければできない場合に他動詞として用いられることなどを指摘している。

第7章では、日本語の「X化」と中国語の“X化”を対照し、日本語の「X化」は名詞的用法が最も多く、形容詞的用法と動詞的用法がそれに次ぐこと、中国語の“X化”は形容詞的用法が最も多く、名詞的用法と動詞的用法がそれに次ぐこと、中国語には副詞的用法が87件見られたが日本語には見られなかったこと、日本語の「X化する」は自動詞の出現率（53.8%）が他動詞の出現率（46.2%）よりやや高いのに対し、中国語の“X化”は自動詞の出現率（79.7%）が他動詞の出現率（20.3%）より圧倒的に高いことなどを明らかにしている。

最後に第8章では、第3章から第7章までの考察をまとめ、残された課題について述べている。

【本論文の評価】

本研究は、日中両語の派生語【X化】の意味的・文法的違いについて、コーパスを使って計量的に分析し、両語の品詞性や自他性の違いを明らかにした点で優れた研究である。また、従来【X化】は漠然と「X₀{を/が}ある性状・状態に～{する/なる}」という意味を表すとされていたが、「X₀」と「X」の関係を丹念に分析し、日本語には九種類、中国語には十種類のタイプがあることを指摘した点でも新規性がある。

その一方で、日中両言語の【X化】において、なぜそのような違いが生じるのかという疑問は残されたままとなっている。しかし、本研究はこのような疑問を解決するための興味深い言語事実を明らかにし、日中両語の【X化】の品詞性や自他性の違いを解く鍵を提示している。これは先行研究を十分に超えるものであり、審査委員全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。